

マシャード・デ・アシスの生との和解

—『プラス・クーバスの死後の回想』と
『アイレスの覚書』から見えてくるもの—

武 田 千 香

1. はじめに

「ペシミズム」は、ブラジルの文豪マシャード・デ・アシス (Machado de Assis, 1839-1908)^{注1}の作風として、多くの場合その筆頭に挙げられるものである。マシャード文学は一般に、1854年の処女詩から1878年の『ヤヤ・ガルシア (Jaiá Garcia)』までの前期と、1880年より雑誌に連載の始まった『プラス・クーバスの死後の回想 (Memórias Póstumas de Brás Cubas)』以降の後期に分けられ、ペシミズムが主たる特徴とされるのは後期の文学の方である。マシャードは、『ヤヤ・ガルシア』出版直後に病に倒れ、デビュー後初めて長期の療養により筆を休めることを余儀なくされた。これを機にペシミズムはその度合いを強め、マシャード文学はここで大きな転換を迎えることになる。その最初を飾ったのが『プラス・クーバスの死後の回想』であった。題名の示す通りこの作品は、すでにこの世を去った主人公プラス・クーバスが自らの人生を振り返る物語であるが、ここで彼の口を通して語られるのは、ありとあらゆる人間と現世の醜悪な側面であった。このため、この作品は一般に、マシャードの悲観主義的人生観が最も色濃く表われているものと言われている。そして、ここで打ち出されたマシャードの人間や生に対する否定的姿勢は、この後の作品でも踏襲され、マシャード後期文学の基調となってゆくのである。

ところが、晩年、遺作となった『アイレスの覚書 (Memorial de Aires,

1908)』において、そのペシミズムに変化が表われる。イヴァン・テイシェイラ (Ivan Teixeira) 氏は、それについてこう述べる。『『アイレスの覚書』では、ほんの僅かではあるがマシャード・デ・アシスのペシミズムが緩和した』^{注2}。確かに『アイレスの覚書』は、『プラス・クーバスの死後の回想』と比較すると、一転して情愛に満ちた温かい作品になっている。一体なぜ、同じ人間がこのように対照的な作品を書いたのであろうか。晩年のマシャード・デ・アシスに何が起きたのであろうか。その変化を引き起こしたものは何だったのか。彼は、どのようにして重度の悲観主義を転換したのか。

この問題は非常に壮大であり、それを探求するためにはマシャード文学全体と作家本人の生涯をも視野に入れなければならない。だが、それを導くための第一歩として、本論ではまず対象作品を、違いがもっとも顕著に表われている『プラス・クーバスの死後の回想』と『アイレスの覚書』の2作品に絞って、前者の基調となっている悲観主義的な人生観と、晩年の『アイレスの覚書』の人生観を比較して両者の違いを検討し、晩年のマシャード文学に見られるペシミズムの変化を明らかにしたうえで、その背景にあるものを探ってみたい。その際、手がかりとして〈語り〉に注目しようと思う。というのも、以前、拙論で明らかにしたとおり、マシャード文学とって〈語り〉は生命線とも言えるほどに重要な要素だからである^{注3}。

2. 『プラス・クーバスの死後の回想』のペシミズム

2.1. 幻想である愛と善意と友情

すでに述べたとおり『プラス・クーバスの死後の回想』は、主人公プラス・クーバスが死後、自らの人生を語る小説であるが、この回想記が通常の回想記と異なるのは、語り手がすでにこの世を去って死者となっていることである。語り手プラス・クーバスは、現世と縁が切れていることで実

社会の道德や掟の束縛から解かれ、自由を獲得している。「死んでしまうと、なんと違うことか！ なんとすっきりすることか！ なんと自由！ まるでマントを脱ぎ捨て、スパンコールを溝に捨て去り、思い切り羽を伸ばして、化粧も落とし、飾りもはずして、包み隠さずかつての自分がどんな人間であったかを語るようなものだ。(…) 世間という裁きの目は、死者の国に一步足を踏み入れた途端、美德ではなくなる。(…) 我々は世間の観察結果や裁きに頓着することはない。生きている諸君よ、死人の無頓着ぶりほど無限なものはないのだ」^{註4}。プラス・クーバスは、このような自由な立場に立ったからこそ、その特典を利用して、この世で社会の一員として生きている限りは決して口にできないような人間社会の実相を語ることができたのであった。

だれを憚る必要もないプラス・クーバスは、現世の人間の行動がいかにか利己的であるかを赤裸々に語る。自己中心的で貪欲な人間のとる行動の裏には必ずエゴが隠され、エゴイズムは言ってみれば「普遍の掟 (MPBC36)」だという。一見善行に見える行動も、純粋に無私であることはない。プラス・クーバスは、ある日、道路に金貨が一枚落ちていたのをみつけ、それを警察に届ける。その立派で道義的な行動は多くの人の賛美の対象となったが、実のところそれは純粋な良心から出たものではなく、その前夜人妻ヴィルジリアと不倫関係に陥ったために感じていた疚しさを埋め合わせるための行動であった。プラス・クーバスはこうした行動に「窓の同働性の法則 (MPBC112)」と命名する。すなわち、ひとつの窓が閉まっているために息苦しさを感ずるときには、別の窓を開けて風通しをよくするように、人間は後ろめたさを別の行為で紛らわし、“良心の風通し”をするのである。その証拠にプラス・クーバスは、その数日後に海岸で大金5コントの落とし物をみつけたが、そのときには警察に届けはせず、銀行に預けたのであった。純粋な善意など存在はせず、どんな善行にも下心が隠さ

れ、偽善にすぎないのである。

善意ばかりではない。肉親同士の愛情も幻想だという。プラス・クーバスは、唯一血を分けた姉妹のサビーナとは、「しょっちゅう喜びのパンや苦悩のパンを、兄弟らしく分かち合う仲の良い兄弟であった (MPBC107)」にも拘わらず、父親の遺産相続の際に銀食器をめぐる仲違いしてしまう。その後、一度関係は修復されたものの、プラス・クーバスが野党系の新聞社を設立したときに、政界との関係の悪化を恐れたサビーナの夫コトリンが、自分とその新聞社との関係を一切否定する声明文を新聞に掲載したために、彼は再度妹サビーナ夫妻と絶縁してしまう。すなわちコトリン・サビーナ夫妻は、血縁よりも世間体の方を優先したのであった。

世間体は行動の重要な規範となり、ときには「家族制度のかすがい (MPBC187)」にもなる。ローボ・ネーヴェスは、妻ヴィルジリアがプラス・クーバスと不貞を働き、隠れ家で密会していることを知りながら、それを見て見ぬ振りをして通した。これは彼が「社会規範でも良心でもなく、世間」を恐れていたからであった。もはや妻を愛していなかった彼は、離婚も考えたが、世間体を気にして踏み切れなかった。すなわち「世間という名の恐ろしい閨房の野次馬は、ネーヴェス一家を離散から防いだ (MPBC186)」わけである。プラス・クーバスの描く現世では、保身のためならば夫婦愛も何の意味も持たない。肉親同士であれ、夫婦であれ、友人同士であれ、「この世のどんな卑小な出来事にも利害が働く」のである。

2.2. 弱肉強食の世界

『プラス・クーバスの死後の回想』の中に描かれる被造物の関係について、バハット・フィーリョ (Barreto Filho) 氏は次のように指摘する。「被造物は互いに連鎖関係にあり、自分の必要性や気まぐれによって、自分のすぐ下にいる被造物を利用する。すると、その被造物はまた、自分のさらに下

にいる被造物に対し、知らず知らずのうちに同じ行動をとる」^{注5}。プラス・クーバスは、幼い頃には「悪魔の子」というあだ名がつけられるほどの意地悪で、奴隷の少年プルデンシオの頸に手綱よろしく縄をかけ、「その背中に跨り、帚で彼を鞭打ちながら、あっちからこっちへと何千回も駆け回らせた (MPBC44)」ものであった。そのプルデンシオもやがてはプラス・クーバスの父によって解放されて自由の身となるが、後にプラス・クーバスは思いがけない彼との再会を果たすことになる。ある日、町を歩いていたときのことであった。人だかりがあったので近寄ってみると、目にしたのはなんと、仕事を怠けたという理由で情け容赦なく黒人奴隷に鞭打ちの刑を下す彼の姿であった。奴隷の必死の懇願にも耳を傾けず、プルデンシオは罵詈雑言を浴びせながら鞭を振り下ろす。それを見てプラス・クーバスはこう結論づける。「プルデンシオにとってその行動の意味は、——それを他人に転じることで——自分が受けた鞭打ちから自由になることだったのだ。私が子供の頃、彼は私の馬になり (…) 呻き苦しんだ。そして、自由の身になった今、(…) 彼は奴隷を購入し、私から受け取った金額に多大な利子をつけて返済しているというわけだ (MPBC138)」。強者は自分よりも弱い者を搾取し、搾取された者はさらに弱い者にその仕打ちを与える。これがプラス・クーバスが導いた現世の理であった。

身分関係ばかりではない。弱肉強食の関係は、身体障害者と健常者の間でも起こり得る。エウジェニアは足が不自由であったが、プラス・クーバスが唯一道徳に反しない健全な恋をした相手であった。ところが彼は、彼女のことを「本当に慕い」ながら、どうしても妻にする気になれない。「なぜあれほどの澄み切った目、あれほどのみずみずしい唇、あれほどの堂々とした風格がある (…) 美人なのに足が不自由なのか？ なぜ足が不自由なのに美人なのか？」(MPBC90)。とうとう彼は、「彼女を本当に愛してしまい、彼女と結婚する」はめに陥ることを恐れ、彼女のもとを去る決心

をする。彼女の方もその気持ちを理解し、「私と結婚するなどという馬鹿なことをしないためにも、逃げるのが正解よ」と言う。逃げたと思われたくない彼は、「君のことはものすごく愛しく思っている。それは天の諸聖人にかけて誓う」と「空々しい誇張法」(MPBC92-93)で言い返すが、結局は政界の有力者の令嬢の方を選ぶことになる。この展開が語られる合間にプラス・クーバスは、自分が部屋に舞い込んできた黒い蝶を、青い蝶でなかったために叩き殺してしまったエピソードを語る。同様にエウジェニアは、「青い蝶 (MPBC89)」ではなく「黒い蝶 (MPBC87)」であったためにプラス・クーバスに捨てられたのであった。

このような社会のタブーを平然と告白した後で、プラス・クーバスは読者に呼びかける。「おそらく前章を読んで不愉快な気分になった繊細な心の持ち主がおられるに違いない。(…) 心の中で、私のことをシニクだと思っておられるにちがいない」。だが、彼は続ける。「私がシニクだって? (…) 私はシニクなんかではなかった。私は人間だったのだ (MPBC92)」と。そう、これこそが人間の正体だというのである。

2.3. 人間の生の本質

以上のような現世の実態と人間の正体を、プラス・クーバスは生前から悟っていたわけではなかった。母親の死に目に会ったときにも、彼は「事物や愛情や家族の脆さ」を漠然と感じた程度で、それ以外に生の本質を考えることは全くなく、ひたすら地位や名声を求め、野心を抱き続けながら人生を送った。そうしてついに、心気症の特効薬を開発し、さあ、人生これからというところで肺炎にかかって不慮の死を遂げたのであった。

それだけに生への未練は強かった。臨終間際、意識が朦朧とする中、もう何年かの命を懇願するほどであった。プラス・クーバスがこのときの自らの意識混濁状態を描いた第7章「譚妄」は、マシャード文学のみならず

ブラジル文学全体から見ても名場面とされる有名な一章である。意識が遠くなってゆく中で、一頭のカバが目の前に現われ、プラス・クーバスは「時の始まり」へ連れてゆかれる。時代をどンドン遡り、真っ白な大空間に到達したところで、突然一人の女性が現われる。聞けば名を、人間に「生」という苦を与える母親にして敵でもある「ナトゥレーザ(自然)またはパンドラ」だと言う。プラス・クーバスは、自分の知っている自然は生によって人間に仕打ちを与えることはない、頼むからもう何年か生かせてくれとせがむ。すると、ナトゥレーザは答える。「何のためにそれっぽちの時間を生きようと言うの？ 食い尽くし、食い尽くされるため？ そんな光景や闘争はもう見飽きたんじゃないの?」。それからナトゥレーザは、プラス・クーバスを山頂に案内し、彼に時代の縮図を見せるのであった。この場面は少し長くなるが、『プラス・クーバスの死後の回想』の基底を成す世界観であるので引用することにしよう。

私の目には前を通り過ぎるものすべて——苦悩と快樂——が見えた。栄光という名のものから、惨苦という名のものに至るまで、愛が苦しみを増殖して行く光景もあれば、惨苦が脆弱さを加速してゆくのも見えた。続いて現われたのはがつつむさぼる食欲、燃えさかる怒り、涎を垂らす妬み、汗にまみれる鍬とペン、野心、飢え、虚栄、憂鬱、富、愛、ありとあらゆるものが人間を、まるでおもちゃのガラガラのように揺すり、雑巾のようにボロボロにするのであった。(…) 苦しみはいつとき後退するが、代わって現われるのは、夢なき眠りという姿をとる無関心か、あるいは苦しみの異母兄弟である快樂だ。すると人間は、煩悶して反逆的になり、事物の宿命に先駆けんと、臍気で冷酷な端切れで縫い合わされた幻

像を追いかける。触れることのできない端切れ、存在自体がおぼつかない端切れ、姿も見えない端切れ。これらの端切れが架空の針によって、心もとない縫い目で接ぎ合わされている。この幻像は——これこそが幸福という幻なのだ——絶えず人間から逃げたかと思うと、ときには裾をつかませる。人間はそれを胸に巻きつけてみるのだが、幸福は嘲笑うような笑い声をあげて、夢幻と消えてしまうのだった (MPBC37)。

このような惨状をみせつけられて、プラス・クーバスは呻吟せずにはいられなかった。めまぐるしく迅速に流れてゆく時の流れの中で、人間の存在はちっぽけで空しかった。「それは同じように速く、単調に過ぎてゆくのであった」。とうとうプラス・クーバスは生に幻滅し、ナトゥレーザに自分を呑み込んでくれるように頼むのであった。

この作品において人生は、空しく苦しみの単調な繰り返しである。ドナ・プラシダは貧しい家の生まれで、若くして夫に先立たれ、苦勞して女手一つで娘を育てたが、その娘にも家出され、結局は良心がとがめながらも背に腹は変えられず、プラス・クーバスとヴィルジリアの密会場所となっている隠れ家の管理人を引き受けた。そんなドナ・プラシダの生涯についてプラス・クーバスはこう語る。「ドナ・プラシダは生まれたときにはまだ言葉が話せなかったが、もし話せたとしたら、おそらく自分の創造主にこう言ったことであろう。「ただいま参りました。何のご用で私をお呼びになったのでしょうか」。するとこんな答が返ってくることであろう。「おまえを呼んだのは、指をレンジで火傷し、夜なべで縫い物をし、ろくに食べ物も食べず、苦勞しながら東奔西走し、病に倒れ、快復したかと思えばすぐにまた病床に伏せ、また快復し、今、悲嘆に暮れたかと思えばすぐに絶望し、翌日には達観し、その間も手は常に鍋を揺り動かし、目は縫い物を

みつめ、そしてとうとうある日、泥まみれになって病院でこときれるためなのだ。気の毒だが私がおまえを呼んだのはそのためだ」と。実際、ドナ・プラシダの最期は慈善病院の粗末なベッドの上でのことだった。

みじめな最期を迎えたのはドナ・プラシダばかりではなかった。プラス・クーバスに金や宝飾品を貢がせた美女マルセーラも天然痘に罹り、かつての美貌は見る影もなくなって、修道院のベッドで「やせ細り老いさらばえて、すっかり醜くなって (MPBC229)」息をひきとった。足が不自由なエウジェニアが最期を迎えたのは、スラム街の粗末な小屋であった。人生とは何と無駄で苦しいものなのか。自然の与える仕打ちはなんとむごいものなのか。素直でやさしく聖人のような母にも「癌は美德と無関係に蝕み」、その死は「長く惨く、実に精緻で冷酷で執拗であった」。人生とは、「生という神秘」から「死という神秘 (MPBC8)」に移行する「不可解で不条理な (MPBC74)」悪夢なのであった。人間は「その移行の間に感覚の快樂と心の安寧を求めて行動し、言い争うが、結局そのすべての根底に見いだすものは、心の苦しみ、病、死なのである。これこそ詩だと思ったものも、生の真実だと思ったものも、結局は無であり狂気なのである」^{註6}。

プラス・クーバスの一生も「否定」の連続であった。「私は膏薬によって名声を得ることもできなかつたし、大臣にもなれなかつたし、カリフにもならなかつたし、結局結婚すらできなかつた」。だが、その一方で全く幸運に恵まれなかつたわけではない。「私はドナ・プラシダのような死を迎えることもなければ、キンカス・ボルバ (筆者注：プラス・クーバスの友人で最期は精神に異常をきたした) のように半分乱心することもなかつた」。この結果、彼の人生は「すべてを合算すればプラスマイナスゼロとなり、五分五分」で終わったかに見えた。ところが、プラス・クーバスは言う。「私は此方の世に来てから僅かながら差益が黒字になったことに気がついた」と。その黒字とは「自分が子供を持たなかつた」ことで

(MPBC230)、理由は「我々の不幸な遺産を一人の被造物にも伝えずに済んだからだ」というのである。黒字とはいえ、それは純然たる「プラス」ではない。マイナス（否定）をさらにマイナス（否定）にした結果生じた“マイナスのプラス”なのである。

以上のことからわかるように、『プラス・クーバスの死後の回想』で暴かれる人間の生は残酷きわまる惨いもので、その下敷きとなっているのは救いの余地のないペシミズムである。

3. 『アイレスの覚書』

だが、それから28年後、そのペシミズムは、マシャードが亡くなる直前に発表した『アイレスの覚書』で大きな変化を遂げる。

『アイレスの覚書』は、退官した元外交官が故郷リオ・デ・ジャネイロで送る余生を日記の形で綴ったものの中から、編集者 M. de A. が1888年～89年の2年間分をまとめたという設定のもとに書かれた小説である。日記には、子供のいないアギアール夫妻との親交の様子や、彼らが実の娘や息子のように可愛がるフィデリアとトリスタンが結ばれるまでの過程が、アイレスの観察を通して描かれている。

3.1. 溢れる情愛

この小説は、『プラス・クーバスの死後の回想』とは打って変わって、情愛に溢れる温かい雰囲気醸し出している。『プラス・クーバスの死後の回想』においてエゴの衝突を繰り返し、欺き合った人間同士は、ここでは深い信頼関係で結ばれている。主要人物のアイレス、姉妹のリタ、知人のアギアール・カルモ夫妻、フィデリア、トリスタンの6人はいずれも信頼し合い、慈しみ合っている。この中で肉親関係にあるのはアイレスとリタの2人だけで、あとは全員他人の関係である。それでも信頼関係は成立

している。

アギアールとカルモ夫妻は子供のいない老夫婦だが、彼らには実の子供のように可愛がり、また慕われてもいる若くして未亡人になったフィデリアとトリスタンがいる。カルモとフィデリアはまるで「母親と娘のように愛し合い」(MA28)^{註7}、フィデリアに接するカルモは「すべてがやさしさそのもの」(MA39)で、フィデリアはカルモに対して「完全に娘のような雰囲気なたたえた愛らしい献身ぶり」(MA124)を見せる。フィデリアとカルモは互いに母・娘と呼び合うほどの仲であった。トリスタンはカルモの友人の息子で、幼少の頃からアギアール夫妻の家に出入りし、夫妻は我が子のように可愛がっていた。彼は「より多い愛情ゆえに実の母より継母(=カルモ)の方になつき」(MA34)、彼と夫妻の間柄は「実の息子でもなかなかここまで意気投合しない」(MA90)ほどの親密ぶりであった。

人間同士の深い絆でとりわけアイレスが紙幅を割いているのが夫婦愛である。ある日、アイレスはアギアール夫妻の銀婚式の祝賀会に招かれ、そこで夫妻の実に仲睦まじい姿に心打たれる。その晩の印象をアイレスはこう記す。「まず印象に残っているのが、彼ら夫婦の絆だ。もちろんほんの数時間のパーティーで、二人の心の状態を判断するのが安全ではないことは承知している。そのような場であれば当然昔の思い出も鮮やかに甦るだろうし、周りの人たちから情愛を受けることで、自分たちの情愛も倍増されるであろう。だが、そんなことではないのだ。彼らの間には、そんな状況を乗り越えてしまうような何かが、他人が味わう喜びとはちがう何かがある。歳月が天賦を強め、純化した結果、二人がまったく一人の人間に生まれ変わってしまったかのようなのだ(MA24)」。彼らの仲の睦まじさはリタも認めるところである。「あの二人がどれだけ仲がいいか想像を超えているわ(MA24)」。もともとアギアール夫妻は多くの困難を乗り越えて結婚に至っている。アギアールの心を形作っているのが、いくつもの小さ

な石だとすれば、カルモ夫人はセメントと石灰になって、ばらばらになり
そんなそれらの石をしっかりと固めながら、艱難を乗り越えて結婚したと
いう (MA31)。それ以降は「互いに慕い合い、何度かにわたる嫉妬にも拘
わらず、あるいは、それだからこそずっと慕い合い続けてきた (MA31)」
のであった。妻を亡くしているアイレスから見れば心から羨ましい夫婦で
あった。「アギアールは幸せ者だ。外から持ち帰った不安や憂鬱な心を癒
やすために、妻との会話以上に安らぎを与えてくれるものはなかった。妻
の眼以上に甘く論してくれるものもなかった (MA32)」。「カルモのいない
アギアールは何の意味も持たなかった (MA108)」。どちらかが苦悩すれば、
「互いに交換し合い、背負い合うため、二人の苦しみが倍になる (MA88)」
ような夫婦であった。相手を思いやるあまりの結果であろう。アギアール
とカルモのこうした夫婦愛は、『アイレスの覚書』の中でもっとも入念に
描かれているものである。

彼らとアイレスもまた信頼関係で結ばれていた。アギアール夫妻とアイ
レスは7年前、アイレスがまだ現役の外交官であった頃知り合い、親し
みを感じ合っていたが、アイレスはそれが自分の「公使」という肩書きに
よって生じたものだと思っていた。しかし、退官してからもごく内輪だけ
の銀婚式に招待してくれたことで、アイレスは彼らに対して「人間として
大きな親しみ (MA24)」を感じるようになる。社会的地位や肩書きとは関
係のない個人的な絆になったのである。また、アイレスはフィデリアとト
リスタンとも信頼関係で結ばれていた。フィデリアはアイレスに「全幅の
信頼を置き、包み隠さず心を開いていた (MA153)」し、トリスタンは、
議員選出馬のためにポルトガルに行かなければならなくなったことを、ア
ギアール夫妻に言う前にアイレスに打ち明けるほどアイレスに信頼を置いて
いた (MA170)。

深い絆が結びつけているのは主要登場人物だけではない。フィデリアの

実家が所有していた農場の奴隷たちは、奴隷解放令が施行された後も、フィデリアとの「いかなる証書や法令も解き放つことのできない永遠の神聖なる結びつき」故に農場を出たがらなかった (MA79)。

以上の例は、この小説の中に登場するほんの僅かなものである。「情愛 (afeição)」「やさしさ (ternura)」「親しみ (simpatia)」「慈しみ (carinho)」といった言葉は作品中に溢れている。上記の6主要人物に限らず、登場人物らは、アイレスが病に倒れれば見舞いに行き (MA79)、誕生日には祝いのメッセージを送る (MA104)。どの人も思いやりの心を忘れない。カルモは、トリスタンがブラジルに来るという知らせを受けるや心のこもった準備を始めるし (MA68)、フィデリアと一緒に裁縫をするときには、不得手なフィデリアにペースを合わせ、遅れが目立たないように気を遣う (MA91)。会話の際のアイレスは、なるべく相手が話したがっていることを話題に出して場を愉ませるし (MA64)、フィデリアの叔父カンポスは、トリスタンが議員選挙に当選したためにポルトガルでの永住を決めたことを、なるべく衝撃を与えないように嘘を交えながらやんわりとアギアール夫妻に伝えようとする (MA173)。だれもが相手を思いやり、善意と慈しみを以て相手と接するように心がけるのである。

3.2. 生きることの苦しみ

しかしながら、人間の生に対するペシミズムが完全に払拭されているわけではない。

愛や喜びがある一方、悲しい別離もある。アギアール夫妻は、我が子同然のフィデリアとトリスタンの結婚を喜んだのもつかの間、二人がポルトガルに永住したことにより、孤独な老後を送ることになってしまう。二人の様子を見舞いに訪れたアイレスが目にしたものは「微笑んで暮らそうと思いつつも慰むこともできず」、「自らに対する郷愁の念のみで (MA174)」

しか慰めることしかできない二人の姿だった。それは、トリスタンとフィデリアが、二人の義父母をポルトガルへ連れてゆこうと、出発間際までできる限りの手を尽くしたにも拘わらず招いてしまった止むに止まれぬ結果であった (MA170)。人間に生きようとするエゴがある限り、ときには望もうと望むまいと他人を犠牲にしたり、切り捨てなければならないことがある。ポルトガルに行くことは、新しい人生を始めようとするトリスタンとフィデリアの選んだ苦渋の決断であった。アイレスはこれを見て言う。「若者には生きて愛する権利、そして死人と老いぼれの許を喜んで去ってゆく権利がある (MA173)」と。彼にとっては「生きるのもひとつの権利であれば、若さももうひとつの権利 (MA57)」なのであった。こうなると「生は老人にとっては疲れる仕事 (MA29)」となる。人は生きていく限りエゴを背負う。必ず老いを迎え、愛する者との悲しい別離に遭う。テイシェイラ氏はここに「生きることの苦悩」を指摘している¹⁸が、これは『プラス・クーバスの死後の回想』のナトゥレーザが与えた生という名の苦に通じるところがある。

このほかテイシェイラ氏は、この小説に描かれる自然や運命に翻弄される人間の姿もまた、人間の悲しい性だと指摘する¹⁹。最初の結婚でフィデリアは、父親の政敵の子息を結婚相手に選んでしまったことから、父親の怒りに触れ、勘当状態に追い込まれる。だが、まさに運命のいたずらか、愛を押し通して結婚した夫は、新婚早々ポルトガルで客死し、フィデリアは若くして未亡人となってしまう。両親の許へ帰るわけにもいかず、彼女は叔父のもとに身を寄せ、そこで叔父の友人のアギアールとカルモと知り合い、彼らを両親代わりとして頼るようになる。だが、これが縁で、やはり彼らを実の親のように慕うトリスタンと出会い、恋に陥るのだが、彼と結婚することは、アギアール夫妻に恩を仇で返すような結果を招くことだったのである。「それが運命の望むところだった (MA163)」のか、人間

の力の及ばぬところで、運命は人を操るのである。

また、この小説には「病」と「死」が多くとりあげられている。アイレスの「自分と老いの闘い」である膝痛 (MA104)、カルモ夫人のリウマチ (MA96)、フィデリアの神経痛 (MA23)。そして、この日記が記録している僅か1年半の間に、病はアイレスの近所の競売人フェルナンデス、アイレスの友人のミランダ、フィデリアの実父のサンタ・ピアの命を奪う。立て続けに襲う病に、まさに「Les morts vont vite. (死者は足早に去って行く) (MA52)」ことになる。

このほかアイレスの「この世はすべてがはかなく、(…) 矛盾に満ちていて空しい」という世界観も、「人生とは行動の繰り返しだ」という人生観も、『プラス・クーバスの死後の回想』のものと相通じるところがある。

3.3. エゴを背負った人間たち

この小説に登場する人物たちは、情愛や信頼で結ばれてはいても、純粋な善人では決してない。心の内には邪悪な気持ちやエゴを抱えている。アイレスは、フィデリアと父親の和解の邪魔をしてやりたいという意地悪な気持ちを抱いたし (MA46)、本書でもっとも賞賛されているカルモですら、トリスタンが学生時代にポルトガルへ旅行する両親について行きたいと言いだしたとき、彼を自分のそばから離したくないという利己主義的な理由から反対している (MA35)。リタは、思ったことはすべて口に出さないと気が済まない質で (MA131)、そのためカルモの秘密もすぐにアイレスに暴露してしまう (MA162)。トリスタンに関しては、財産目当てでフィデリアとの結婚を望んだのではないかという疑惑もある (MA139)。このほかこの作品には、「人に厭な思いをさせるために生まれてきたような (MA118)」ファリア氏や、「陰口がお似合い (MA69)」のセザリア夫人といった人物も登場する。

以上のように『アイレスの覚書』において人間の生や現世の否定的な側面は、『プラス・クーバスの死後の回想』ほどの過激さを伴わないまでも、決して消滅しているわけではない。老・病・死・愛別離苦といった苦を背負う人間の生は、それ自体がやはり苦なのであり、そういった人生観を下敷きにしている点では、両作品は共通している。ただ、対照的なのは、一方ではこのことを徹頭徹尾否定的に捉え、現世を全く救いの余地のない修羅場と見るのに対し、もう一方では否定的な側面を認めながらも、それを相殺するような肯定的な面をも見出し、そこに喜びを見出している点である。アイレスには、現世は苦もあるが楽もあり、「この世ではすべてが緩和される。だからまだ救われる (MA63)」という見方ができたのである。プラス・クーバスにとって持つ価値のなかった子供が、アギアール夫妻にとっては、それを持たないことが唯一の傷となっているのも非常に対照的である (MA27)。

では、なぜプラス・クーバスには否定としてしか捉えられなかった生が、アイレスには肯定として捉えられたのだろうか。

この二作品のように人間の生を描く小説においては、当然のことながら主要な登場人物の生に対する姿勢は作品全体から見ても重要な意味を持っている。となれば、プラス・クーバスとアイレスのとった対照的な生に対する姿勢のちがいは、文学作品としての構造にも何らかの変化を与えている可能性がある。

実は、『プラス・クーバスの死後の回想』と『アイレスの覚書』との間には、〈語り〉において重要な違いがある。この違いと、両主人公の生に対する姿勢の対照性の間には、何か関係があるのではないか。次章では〈語り〉の構造の違いに注目して、なぜ両人が生に対して対照的な姿勢をとったのかをさぐってみよう。

4. 〈語り〉と生に対する姿勢

4. 1. 〈語り〉の構造の違い

『プラス・クーバスの死後の回想』と『アイレスの覚書』とでは、〈語り〉の構造はどのように違っているのだろうか。

シュタンツェルは、小説の物語状況を構成する重要な要素として「人称」、「遠近法」、「叙法」の3つを挙げる。「叙法」は、語りが人格化された語り手によって語られているか、または映し手によって語りが進行しているかに注目し、「人称」は、語り手が作中人物と同じ世界に生きているか（1人称）、あるいは作中人物の属する世界とは別のところに存在しているか（3人称）に注目して物語状況の形態を分別する。『プラス・クーバスの死後の回想』と『アイレスの覚書』を比較した場合、この2要素に関しては、いずれも「人格化された1人称の語り手」の語る物語という点で共通している。では、「遠近法」に関してはどうか。

第三の要素である「遠近法」は、シュタンツェルの言葉を借りれば、「小説に描かれた現実を読者がどのように受け止めるか、その受け止め方に読者の注意を向けさせ」、「その知覚の仕方は、(…)語られる事柄が提示される際の立場が出来事の内部にあるか、それとも出来事の外部にあるかによって決まる。つまり提示の視点が、前者の場合は、主人公の内部もしくは出来事の中心に置かれており、後者の場合は、語り手、すなわち自分自身は筋の担い手でなく、主人公と出来事との同時代人もしくは目撃者、あるいは直接関与しない年代記作家として、事件を報告する語り手の中に置かれている。これに応じて、内的遠近法と外的遠近法とが区別される」¹⁰としている。これを2つの小説にあてはめて考えてみよう。『プラス・クーバスの死後の回想』の場合、語り手はすでにこの世を去った死界の存在ではあるが、生前のプラス・クーバスと死後のプラス・クーバスは同一人物であり、この小説で語られているのはプラス・クーバスの身に起こった出

来事と、そのときのプラス・クーバスの心の中の動きである。したがって、物語の提示の視点はプラス・クーバスの中に置かれ、『プラス・クーバスの死後の回想』では「内的遠近法」が採用されているといえることができる。

一方、『アイレスの覚書』の場合は、物語の大半が、アイレスによるアギアール夫妻の生活と、フィデリアとトリスタンの愛の物語の記録である。これらの行動にアイレスは直接参与しているわけではなく、傍観者として観察し、記録している。すなわち『アイレスの覚書』では概して「外的遠近法」が採用されていて、アイレスは「周縁的な1人称の語り手」^{注11}だといえることができる。シュタンツェルによれば、このような「周縁的な1人称の語り手」が語る小説では、「その意味内容は、主人公とその環境がそれ自体としてどのような在り様をしているかではなく、出来事を中心をはずれた所から眺め、感じ、評価する語り手によって、主人公とその環境がどのように捉えられているかという点にある」^{注12}という。このことはつまり、『アイレスの覚書』の意味内容は、アギアール夫妻の物語や、フィデリアとトリスタンの物語がどのような展開を見せるかということ以上に、アイレスの観察方法やその結果が重要だということになり、アイレスの観察方法や観察行為そのものが主題化されていると考えることができる。

では、『アイレスの覚書』での外的遠近法の採用と、アイレスのとることができた生に対する肯定的な姿勢とは、どういう関係があるのだろうか。シュタンツェルは、外的遠近法を採用することは「出来事を中心をはずれた所から眺め」ることだと言っている。アイレスが生に対して肯定的な姿勢をとることができたのも、中心的な出来事との間に距離をおいたからではないのだろうか。

4. 2. 『アイレスの覚書』に存在する2つの距離

そもそもアイレスと出来事との間に横たわる距離とはどのようなものなのであろうか。これには、観察者としての距離と、生そのものに対する距離の2種類が考えられる。

4. 2. 1. 観察者としての距離

一つは、アイレス自身が観察対象との間に意識的にとったり、または彼の性格ゆえに生じる距離である。アイレスは観察結果を日記にしたためる際に、極力対象との間に距離を置こうと努めている。例えばアイレスは、アギアル夫妻らの行動を観察し、記録するときにも、詳細に立ち入ったり感情移入したりすることはせず、あるいは一人の肩を持つことのないよう心がけている。アギアル夫妻に関して、彼らと共通の友人カンポスから聞いた話を日記に記すときに彼はこう書く。「彼(カンポス)が言ったことをここに書き写すには、今日はもう遅すぎるし、後から印象が立ち消え、書くに値することだけが記憶として残ってから書くことにしよう」。出来事の直後では興奮がまだ冷めやらぬ状態にあるため、冷静に記録することができないという配慮であろうか。そして、翌日それを記す際にも、「出来事や人物を理解するのに必要な分だけを(…)要約しよう(MA30)」と断わりを入れる慎重さを見せている。アイレスは誇張表現を嫌い(MA34)、できる限り簡潔な報告を心がける(MA36)。そして、相対立する見解があるときには、どちらか一方だけを取り上げることはせず、その両方を併記する。トリスタンが財産目当てでフィデリアと結婚したのではないかという疑惑に関しても、アイレスは、敢えて自分の意見とは正反対の、その疑惑を肯定する意見も記している。さらに彼は邪推も嫌う。例えば、フィデリアと同様に未亡人であるリタが、フィデリアの再婚話を耳にしたときの複雑な気持ちをつい分析し始めそうになるが、アイレスはすぐに「いや、そんな風に考えては、あんなに素晴らしい人を疑うことになってしまう」

と自制する (MA149)。アイレスは、なるべく他人の欠点を見ず、長所をみるよう努力するのである。他人の悪口を言うのが生き甲斐のセザリア夫人に対してすら、気さくでやさしくいつも笑みを絶やさないといった長所を見出して、欠点を相殺しようとする (MA82, 157)。他人の悪事に対しても寛容である。使用人ジョゼのくすねた金に対しても怠け癖に対しても、アイレスは見て見ぬ振りをするのである (MA94, 112)。

元来アイレスは争い事を好まず、人を憎まない (MA22) 物静かな性格で (MA47)、相手の話を黙って聞くタイプである (MA98, 158)。友人との会話でも個人的な話題に立ち入ることは避け (MA81)、他人とは精神的な距離のみならず、物理的な距離を置くことを好む。「たとえ相手がリタであろうと、ときに私は仲間から離れて自分の身を洗う必要がある (MA50)」と言って、彼はときどき数日間だれとも会わずに過ごす。

以上のようにアイレスは、周囲の人間に対し、観察上の距離を置くばかりでなく、物理的な距離をも置く。距離を置くとどのような効果があるのだろうか。観察上の距離に関してバヘット氏はこう指摘する。距離を置くことによって「完璧なまでの中立的な姿勢をとることができる。ただしこのことは無関心を意味するのではなく、感情の不在を意味する。(…)彼の関心には距離があり、それは出来事に対する個人的なかかわりを包含しない」。距離を置くことによって、対象を一面的に見たり感情的になつたりすることなく公平に観察することができるのである。アイレスが気に入らない相手にも長所を見出したり、他人の欠点や悪を大目に見られるのは、この姿勢の結果なのである。

物理的な距離に関しては、アイレスが自らその理由を日記で述べているので、それを引用しよう。彼がなぜ、互いにやもめになった後も姉妹リタと同居しないのか、その理由を述べている箇所である。「もし一緒に住んでいたならば、私はおそらく彼女の中に何か些細な欠点を見出すだろうし、

彼女の方も私に見出すことだろう。だが、このように離れているからこそ、会えば特別な喜びを味わえるのだ」。その後、アイレスはポルトガルの古典書から次のような文を引用している。「仲のいい友人同士は互いに離れていたほうがいいのだ (MA144)」。過度に親密にならず、適度な距離を置くことによって、相手の欠点や悪事に対して寛容になり、思いやりと情愛を抱くことができるのであろう。このような寛大な姿勢は、内的遠近法によって書かれた『プラス・クーバスの死後の回想』にはなかったものである。

ところで『アイレスの覚書』には、アイレス自身が主題化されている部分もある。当初、素直に老いを受け入れることのできなかつたアイレスは、若い未亡人のフィデリアを見て色めき立つ。だが、アギアール老夫婦と、若いフィデリアとトリスタンの恋を観察するうちに、次第に自らの姿を前者の方に重ね合わせるようになり、後者に対しては年齢の隔たりと感覚のずれを感じるようになる。アイレスはこうして最終的に老いを受け入れるのである。すなわち『アイレスの覚書』は、アイレスの自己発見の記録と捉えることもできる。だが、注意しなければならないのは、この自己発見とて、アイレスが自分の内部を観察・分析した結果得られたものではないことである。彼が己の老いを受容できるようになったのは、他者に自己投影した結果であった。言い換えれば、対象との間に距離をとり、外的視点によって観察した結果だったのである。

4.2.2. 生に対する距離

もうひとつの距離は、生に対する距離である。

アイレスは、1年前に外交官を退官し、余生を故郷のリオ・デ・ジャネイロで「天涯孤独の身で (MA104)」寂しく送る男やもめである。現役を完全に引退し、「残りの日々を数えながら過ごす (MA145)」「もはやこの世の者ではない (MA164)」身である。すなわち生者たちが住む“この世”

はもう彼の住むところではなく、彼の心境はすでに“あの世”のもので、現世を傍観者として眺めていることになる。この小説が死者の世界を基点にしていることは、冒頭の場面が墓場に設定されていることから察せられる。しかも、そこに登場するアイレス、リタ、フィデリアの3人は全員やもめで、死を背負っている人々なのである。

ところで、『アイレスの覚書』には、M. de A. という署名のある序文がある。ここには、この本がM. de A. の手によって、アイレスの日記から「共通の話題を持つ部分だけを抜粋して」編まれたものであることが述べられているのであるが、その冒頭には「拙著『エサウとヤコブ』を読んでくださった方は……」という言葉がある。『エサウとヤコブ (*Esau e Jacó*, 1904)』とは、マシャードが『アイレスの覚書』の4年前に発表した作品であり、このことはつまり、M. de A. とはマシャード自身であることを自ら明言しているということである。マシャードは、堂々と半ば実名で小説に登場し、アイレスの代弁者としての自分の存在をアピールしているのである。

このアイレスという人物については、バヘット氏も「アイレスは哲学的な憂慮を払拭した後のマシャードの精神である」と述べているように^{注13}、マシャードが自らを投影して作り出した人物との見方が一般的であり、テイシェイラ氏も、『アイレスの覚書』を執筆した頃のマシャードをアイレスに重ね合わせている^{注14}。アイレスの物の見方には、マシャードのそれが色濃く反映していると見て間違いのないであろう。

『アイレスの覚書』を執筆した当時のマシャードは、1904年に愛妻カロリーナを亡くしており、献身的な世話をするマリオ・デ・アレンカール (Mário de Alencar) ら友人に囲まれながらも、持病の突発性発作が再発して、孤独で辛い余生を送っていたらしい。その頃ワシントン在住の友人ジョアキン・ナブコ (Joaquim Nabuco) に書き送った手紙には、孤独に苛まれる悲痛な胸の内が打ち明けられているという^{注15}。愛妻に先立たれ、自ら

の健康も損なって、マシャードは死をかなり意識していたと想像される。間もなくこの世を去ってゆく身として、死の立場に立って現世を見たアイレスの視点は、マシャード自身のものでもあったのであろう。

このように死の立場に立ったとき、作家は現世をどのように認識するのであろうか。伊藤整氏は、明治の近代日本文学の現世的な社会関連性において人間を描いた作品と、現世を放棄した作家（文士）の書く作品の違いについて次のように指摘している。国こそ違え、人間の生に違いはない。少し長くなるが引用してみよう。

文士は人間性全体の相互関係にある力の働き合いや争いや調和の根本形を見ようとする。生活者にとっては多くの場合意味を持たないと思われるものに文士は生命の表現を見て、そういうものの組み合わせの図式を考える。しかしそういう人間のエゴの組み合わせは悲しい、または醜い、または残酷な印象に集中される。生命が拡大しようとして他のエゴや権力に抑止されるときに、初めて生命の存在感は現われる。抵抗感が生命の存在を認識させるのである。それ故現世的なまたは社会的関連性において人間を描いた文芸作品の中に現われる生命の相は、一般的に否定的である。悲哀、苦痛、倦怠、羨望、不安、憎悪等の感情をもって初めて生命が描き出されるのである。

だが現世を放棄したものにとっては、実在自体が美しく意識される。対人関係から解放されたとき、急に空の美しさ、山の美しさ、木の葉の美しさなどが意識される。人の姿の美しさもまた日常の生活を共にしている人間に対しては感じられず、自分と利害関係を持たない異性に突然逢った時に強く

意識される。そういう肯定的な生命観が最も強く感ぜられるのは、その人間が死ぬことを意識したときである。自分の生命が無に帰し、この世の自然と人間の総てが自分から失われるという意識を持っている人間にとっては、虫も木の葉も、嫌悪と憎悪とで今まで接していた人間も、ことごとく美しい本来の姿を現わす。なぜなら、その人間にとっては、そのとき現世における利害の争いと虚栄の執着が失われ、自然と人とは、その単純な存在として意識されるからである。

(…) [死または無の意識によって描かれた] 作品は、現世の人間関係を描いた作品が否定的情感によって維持されているのに対して、肯定的情感によって支えられている。(…) というのは、現世の人間関係を成立させている生の基盤は、他者への働きかけや他者からの働きかけを描く故に、その抵抗感は苦しみや悩みとして意識されるものであるが、これらの作品では死や無から見る故に、生は全的に望ましいとして肯定的に見えるからである。

(…) また無や死の上に立つ生命の認識は、本人が死を意識した時にのみ現われるものではない。本人の肉親、近親、愛人の死によって、自分の生きることの意味を根本から考え直すような時にもそれが起こる。^{注16}

愛妻カロリーナに先立たれ、自らの命ももう長くはないことを認識していたマシャードの心境は、まさに伊藤氏の言う「死または無の上に立つ認識」だったのではないか。そして、この認識を持つことによって、かつて現世の人間関係の上に立つ認識を持つが故に過激的にならざるを得なかった彼の悲観主義は和らぎ、逆に生に対する肯定的な認識が生まれるに至っ

たとえることができる。そして、この「死または無の上に立つ認識」を、マシャードは alter ego（もう一人の自分）であるアイレスに託したというわけである。

さらにここで確認しておきたいことは、これまで『アイレスの覚書』においてマシャードが行きついた人生観を、〈語り〉の様式を手がかりに探ったことから明らかなように、マシャードのその晩年の心境なり人生観は、この作品の中でアイレスという人物の中に主題として実現されているばかりではなく、〈語り〉という形式上でも具現されているという点である。すなわちアイレスが隠居者として、生がみなぎる現役の者たちの住む社会から距離を置き、その立場から彼らを観察していることは、作品の主題としてもストーリーや記述の中で扱われているが、彼のその立場はまた〈語り〉においても、「外的遠近法」の採用という形で具現されているのである。以前、私はマシャードが、彼の最初の長編小説『復活 (*Ressurreição*, 1872)』において追求していたテーマを『ドン・カズムーロ』において〈語り〉という形で具現させていることを指摘した^{注17}が、作品の主題を〈語り〉によっても具現させるという点では、『アイレスの覚書』においても同じことが行なわれているのである。〈語り〉が生命線とも言えるほど重要な要素であるマシャード文学にとって、人間や現世を認識する方法に根本的な変化が生じてしまった今、もはやかつて現世の人間関係の上に立つ認識から文芸作品を作成していた頃の〈語り〉をそのまま採用するわけにはいかず、新たな表現方法、そのときのマシャードの人生観をもっともよく表現してくれる〈語り〉の形式を編み出す必要があったのであろう。『アイレスの覚書』が、「出来事を中心をはずれたところから眺める」日記形式になった理由はここにある。「外的遠近法をとる人格化された1人称の語り手」を設定することで、主題の上でも形式の上でも距離感が生じ、死または無の上に立つ生の肯定的認識が完成したのである。一方、『プラス・クー

バスの死後の回想』は、「現世的または社会的関連性における人間」を描いたものであるから、どうしても語り手として現世に執着した人物が必要であった。だから、内的遠近法が必要となったのである。

5. むすび

1908年7月末に『アイレスの覚書』が上梓されて間もなく、マシャードは死の床に就き、2ヶ月後の9月29日に息を引き取った。ジョゼ・ヴェリッシモ (José Veríssimo) は、死期迫るマシャードの口から「人生って、なんていいんだ!」という言葉聞いたという^{注18}。アフラニオ・コウティニーニョ (Afrânio Coutinho) 氏は言う。「『アイレスの覚書』でマシャードは改心して人類に帰依したのである。それは生の勝利であった。(…)マシャードはそこで老境に入って発見したもう一つの生、すなわち人間の善意や生きる喜びが可能であることを示してくれているのである。最高傑作であるこの作品の結論は、必ずしも人間のすべてが悪意や欺瞞やエゴではなく、幻想の海で遭難しても何か救いがあるということである」^{注19}と。

その「何か」とは、アイレスが周囲の人たちから感じたような思いやりや情愛や慈しみだったのではないか。そして、その中でもとりわけマシャードが生の喜びを見出したのが、失ってみてその大切さが痛感された最愛カロリーナとの夫婦愛だったように思う。『アイレスの覚書』にとくに夫婦愛の記述が多いことはすでに述べたが、カルモのモデルが亡妻カロリーナであったことを、マシャードはマリオ・デ・アレンカール宛の手紙の中で明らかにしている^{注20}。「カロリーナの思い出の芳香に満ちた『アイレスの覚書』は夫婦愛の詩、家庭生活の詩、消えてしまった過去の詩である」とルシア・ミゲル・ペレイラ (Lúcia Miguel Pereira) 氏は述べる^{注21}。

生の喜びは、名誉でも地位でも金でもなく、ごく身近な世界にこそ存在することを、齢を重ねる毎にマシャードは実感していったのではないら

うか。奴隷制廃止の翌日のパーティーの席上で、アギアール夫妻はいつにない喜びの表情を見せていた。アイレスは初め、夫妻は奴隷解放を祝っているのかと思ったが、実はそれは、トリスタンがポルトガルから帰国する旨が書かれた手紙を受け取ったための喜びだった。アイレスはこれを見て、「こうやって、公の喜びの中に私的な喜びが生まれ、それはやがて公の喜びを支配してしまう (MA49)」と思った。「どんな法律や宣言や指示を出しても、個人の活動や記録や財産目録を消滅させてしまうことはできない」。どんな公の喜びも、個人の喜びに勝るものはないのである。パヘット氏は「アギアール夫婦の物語は私生活の賛歌」だと述べる。「風習や制度はすべて消滅してしまう (MA72)」が、人間の生は変わらない。「愛するという仕事は疲れを知らないし、絶えることもない (MA52)」。「愛」が「この地のもっとも強い政党 (MA158)」なのである。晩年のマシャードについて、ペレイラ氏はこう指摘する。「彼は人類を嫌ってはいたが、個々の人間は愛していた。(…) アイレスの心地よい招きに身をゆだね、人類の究極の目標や生の意味を忘れて、日常に存在する生を夢中になってみつけた結果、マシャードはひとりひとりの人間に対する愛に行きついたのである」と。

ところで、私には『プラス・クーバスの死後の回想』を読むたびに常々不思議に思ってきたことがある。それは、人生半ばにしてあれほどにまで重度の人間不信に陥ったマシャードが、なぜ一度も自殺に追い込まれることもなく、かつ周囲の人々と良好な関係を保ちながら常識人として69歳の生涯を全うできた^{註22}のか、ということである。この疑問に答えるためには、当然のことながらマシャード文学全体と彼の生涯を十分研究しなければならないが、こうして晩年のマシャードの人生観に触れてみると、やはりそこにはマシャードが『アイレスの覚書』の中で強調したひとりひとりの人間の情愛が大きな役割を果たしていたように思えてならない。周囲の人々

の愛情、とくに妻カロリーナの愛情が彼の心を支え、彼がペシミズムに押し潰されてしまうのを阻止していたのではないかと思うのである。

現世に対して距離をとり、無の立場に立って世界を眺めること——どうやらこれが現世をペシミスティックに見ずに済む良い方法のようである。しかし、アイレス＝マシャードは指摘する。「現役の外交官の一人であったときは、私はこれだけのものを全部一度に信じていることができなかった。私は不安で懐疑的であった。こうやって引退したからこそ、他人の誠意を信じられるようになったのである。現役の者よ、疑うがいい！ (MA159)。」残念ながら、この世の一員として生きている限り、その実践は相当困難なようである。

- 注1 Machado de Assis (本名 Joaquim Maria Machado de Assis) は、ブラジル文学を代表する文豪で、その作品は短編、小説、詩、戯曲、評論、コラム、翻訳、随筆と多岐にわたる。一般にマシャード文学は、1879年付近を境に前期と後期の2期に分けられる。ロマン主義的色合いが濃く、文学的な質においても凡作が多いとされる前期に対して、マシャードの文豪としての名声を不動にしたのが後期の作品であった。どの思潮にも与さず(大枠ではリアリズム作家に位置づけられている)、最小限の表現で最大限を伝えることをモットーに独自の文体を築きあげ、同時代の作家らがブラジルの現実や風俗文化を描くことを心がけていたのとは対照的に、ひたすらブラジル社会に暮らす人間の心を探究し続けた。その文学の基調となっているのは人間に対する深いペシミズムで、人間の行動を決定しているものが愛情や思いやりや寛容ではなく、憎悪や利害であるとの信念のもとに、他より我が、善より悪が先行する人間の本性を描いた。『プラス・クーバスの死後の回想 (*Memórias Póstumas de Brás Cubas*, 1881)』、『キンカス・ボルバ (*Quincas Borba*, 1891)』、『ドン・カズムーロ (*Dom Casmurro*, 1900)』が3大傑作とされている。
- 注2 Teixeira, Ivan, *Apresentação de Machado de Assis*, Livraria Martins Fontes Editora, São Paulo, 1987, pp. 159.
- 注3 武田千香「マシャード・デ・アシスの〈語り〉についての一考察——『ドン・カズムーロ』を中心に——」(國學院大學紀要 第38巻 平成12年3月20日), p. 92.
- 注4 Assis, Machado de, *Memórias Póstumas de Brás Cubas*, Editora Garnier, Rio de Janeiro, pp.76. 以降、本書からの引用文や、記述の内容の引用には(MPBC76)のようにページ数を記すことにする。
- 注5 Filho, Barreto, Machado de Assis, In *A literatura no Brasil* Vol.4, José Olympio Editora, Rio de Janeiro, 1986, pp.160
- 注6 Barreto, pp. 160.
- 注7 Assis, Machado de, *Memorial de Aires*, Editora Garnier, Rio de Janeiro, 1988, pp. 28. 以下、本書からの引用箇所を示したり、本論の内容が記述されている箇所を示すときは、(MA28)のようにページ数を示すことにする。
- 注8 Teixeira, pp. 154.

- 注9 Teixeira, pp. 154.
- 注10 F. シュタンツェル著、前田彰一訳『物語の構造—〈語り〉の理論とテキスト分析—』(東京、岩波書店、1989)、p. 30 - 33.
- 注11 *Ibid.*, pp. 209.
- 注12 *Ibid.*, pp. 209.
- 注13 Barreto, pp. 168.
- 注14 Teixeira, pp. 155-154.
- 注15 Pereira, Lúcia Miguel, *Machado de Assis (Estudo Crítico e Biográfico)* 6ª edição, Editora Itatiaia Limitada / Editora da Universidade de São Paulo, Belo Horizonte, 1988, pp. 270.
- 注16 伊藤整著『近代日本人の発想の諸形式 他四編』第13版、(岩波文庫、東京、1987年), pp. 41 - 44.
- 注17 武田千香, pp. 86.
- 注18 Pereira, pp. 284.
- 注19 Courinho, Afrânio, *A Filosofia de Machado de Assis e Outros Ensaios*, Livraria São José, Rio de Janeiro, 1959, pp.139.
- 注20 Teixeira, pp.155 など .
- 注21 Pereira, pp. 277.
- 注22 Teixeira, pp.97.